

## 『直談因縁集』と狂言「鬼松風」

岩崎雅彦

狂言「鬼松風」は、最古の狂言台本である『天正狂言本』(天正六年(一五七八)書写)だけに見える曲である。主人の命令で伯父から神事能の道具を借りてきた男が、途中で山伏に出会い、二人で雨宿りをし、火を焚いてあたつてゐるうちに、山伏が眠つてしまふ。男が雨に濡れた能の道具を干すために、鬼の面と装束を着て「松風」の謡を謡っていると、山伏が目覚まし、男を鬼だと思つて驚いて逃げて行き、男も驚いて逃げるといふ内容である。以下に適宣表記を改めてその全文を記す。

一、大名一人出て人を呼び出し、神事の能をせんとて、能の道具借りにやる。さて伯父の所より借りて来る。道にて山伏に行き合ひて連れる。雨降るとて雨宿りする。火焚きてあたる。山伏はくたびれて眠る。さて能の道具を着て干す。鬼面かぶりて干すとて、「松風も村雨も、袖のみ濡れて由なやな。身にも及ばぬ恋をさへ、須磨のあまりに罪深し。跡とぶらひてたび給へ」。山伏唄に目覚めて驚く。鬼かとして逃ぐる。鬼も驚く。逃ぐる。追ひ入る。留め。

佐竹昭広氏はこの狂言の類話として、天文

十五年(一五四六)以前成立の『法華経直談鈔』八末・四二(法師功德邑「友見鬼思事」の存在を指摘された。〔下剋上の文学〕昭和42「転落の序章」。この話は以下のような内容である。

天竺乾陀衛国の妓兒(芸能者)たちが大勢で鬼神が住むという波羅子山を通り、ある堂に一宿する。一人があまりの寒さに、鬼の面と衣装を着て火にあたつてゐると、目を覚ました連れの一人がこれを見て、鬼だと思つて驚いて逃げける。他の者も目を覚まし、皆逃げて行く。面を着けていた者もその様子を見て本当の鬼が来たかと思ひ、面・衣装を着けたままあわてて仲間たちの後を追つて逃げる。それを見た仲間たちは鬼が追つて来ると思つてさらに逃げ、ようやく夜明けにたどり着いた人里で、一同は仲間であることに気がつく。

その冒頭に「百喻経云」と記されているように、この話は「百喻経」(四九〇年成立。『大正新脩大藏経』四所収)の卷三・六三の「妓兒著戲羅刹服共相驚怖喻」を原話とし、「ギニト云ハ日本デハ猿樂也」と説明して、原話の「羅刹之服」を「猿樂ノ衣裳」「鬼ノ面」などと、日本風の言葉に改めたものである。

『法華経直談鈔』は、天台宗の僧栄心が近江国で著したもので、こゝした話は寺院での説法に譬喩譚として用いられていたと考えられる。この話と「鬼松風」を比較すると、「鬼松風」では、おどす方とおどされる方が一対一であるのに対して、『法華経直談鈔』では、一対多数である点、「鬼松風」では二人は途中で偶然出會つて連れになるのに対して、『法華経直談鈔』では、初めから仲間同士の一団で旅をしている点などが違つてゐる。

さて、このたび「鬼松風」により近い説話を日光天海蔵『直談因縁集』(日光天海蔵直談因縁集 翻刻と索引(平成10)の中に見出した(巻二・五話)ので、これを紹介したい。同書は天正十三年に天台宗の僧舜雄が常陸国の最勝寺(現下館市)で書写したものである。舜雄は徳川家康の宗教政策顧問でもあつた天台僧正のもとで、関東の天台寺院の興隆に尽くした学徒で(同書、阿部泰郎氏の解題による)本書所収の話も寺院などで語られていたものと思われる。以下に適宣表記を改めて、これを引用する。

「謂是魔所以」ニ付キテ。有ル猿樂方道ヲ往クニ、日晚ニシテ、山路ニ迷フ時、此ニ山人値ヒテ、「里へ出ヅル道何ク」ト問フニ、「里へハ二十里斗リ候。ハヤ日晚ニ候フ間、我ハ炭焼キナリ。吾ガ草ノ庵ニ留リ玉へ」ト云々。時ニ亦、悦ビ、申ス斗リ無シ。行キテ火ヲ焼キ、背ヲ互ヒニアブル時、山林ノ事、背ヲアブレドモ、面ガアマリニ寒キ故ニ、夜、此ノ猿樂、折節、面ヲ二面トツ。

夫レヲ一面、顔ニ押シ当テ、臥スニ、「山人  
方火ヲタキツルニ、我ハ又、一度モ火タカ  
ズ」ト思ヒ、起キ直リ火吹カントスルニ、此  
ノ面ヲ見テ、其ノママ、此ノ山人逃グルナ  
リ。時ニ、「吾ハ猿樂ナリ。誠ノ鬼ニハアラ  
ズ」ト云ヘドモ、只逃グル故ニ、道指南トシ  
テ、曉方、里ヘ下ルト云々。

この話は『法華経』譬喩品の「謂是魔所為」(こ  
れ魔の為せる所なりと謂へり)という語句に關  
する譬喩譚である。ある猿樂が日暮れに山道で  
迷い、偶然出会った山人(炭焼)の庵に泊めても  
らう。火を焚いて暖を取り、互いに背中をあ  
ぶって寝ているうち、猿樂は顔が寒いので面を  
着ける。猿樂が火を吹こうとして向き直ったと  
き、山人は猿樂が着けている面を見て逃げ出  
す。猿樂は自分は鬼ではないと言いながら山人  
を追って行く。そのうち逃げの山人がそのま  
ま道しるべとなって、猿樂は明け方に里へ下るこ  
とができた。

この話と狂言を比べると、人物が一对一であ  
る点、二人が途中で偶然出会って同宿する点が  
共通し、『法華経直談鈔』より設定がより近似し  
ている。さらに舞台が『法華経直談鈔』では天竺  
であるのに対して、『直談因縁集』では、日本で  
ある(特に示されてはいないが、そう考えてさ  
しつかえないだろう)点も共通する。「鬼松風」  
は『法華経直談鈔』よりも『直談因縁集』の方に  
より近いと言えるだろう。佐竹氏は「出典をせ  
まく『直談鈔』に限定するつもりはない」と、慎  
重な見解を示されたが、『直談因縁集』所収話の

出現により、それが結果的に正しかったことが  
証明されたわけである。

『天正狂言本』は東国で演じられていた狂言  
が書き留められたものであるが、近江で書かれ  
た『法華経直談鈔』よりも、常陸で書かれた『直  
談因縁集』の話の方がより「鬼松風」に近いのも  
偶然ではなからう。ただし「鬼松風」が『法華経  
直談鈔』の方に近い部分も存在する。まず『法華  
経直談鈔』と「鬼松風」では、鬼の面と装束を着  
けているのに対して、『直談因縁集』では、装束  
は着けていない。また、最後のところで『法華経  
直談鈔』と「鬼松風」では、面を着けていた本人  
が、相手が自分を鬼と勘違いしたことに気づか  
ず、本当の鬼が出たと思つて自分も驚くのに對  
し、『直談因縁集』では、猿樂が相手の勘違いに  
気づいている。このような点を考えると、『直談  
因縁集』の話も「鬼松風」の直接の典拠とは言え  
ず、やはり寺院の説法などで広く語られていた  
譬喩譚の一つが狂言の素材となったと考える  
べきだろう。『直談因縁集』が書写されたのは、  
『天正狂言本』より七年遅いが、こうした類の話  
が『天正狂言本』以前にすでに語られていたと  
推測することは許されるであろう。むしろ『天  
正狂言本』とほぼ同時代にこうした話が東国で  
書写されていたという事実の持つ意味は大き  
いと思われる。

田口和夫氏は、説話では寒さのために面・装  
束を着けるのを、「鬼松風」が濡れた道具を干す  
ためというふうに変えたのは、「松風も村雨も、  
袖のみ濡れて」という「松風」の謡を男に謡わせ

るためであると指摘された(岩波講座『能・狂  
言』Ⅴ狂言の世界(昭和62)「狂言の素材」。「能・  
狂言研究」(平成9)「狂言以前」)。「鬼松風」は  
「清水」「伯母ヶ酒」「拔殺」など、人が鬼に化ける  
現行の諸曲と比べると、筋立てが単純で、いま  
一つ展開の面白味に欠ける。そうした筋の単純  
さを補う意味で、「松風」を謡う趣向が取り入れ  
られたのだろう。話として聞いた場合には、相  
手を鬼と間違えるという点だけで十分面白  
いのだが、狂言として舞台上に載せた場合には、  
演技上の見どころが少ない。そのあたりがこの  
曲が廃曲になった理由の一つだろう。

原話では玄人の猿樂の役者であったのが、  
「鬼松風」では神事能を演じる素人になつて  
いるが、能でも狂言でも猿樂の役者が作品の登  
場人物として出る例はない。能・狂言には猿樂  
の役者を登場人物として出さないという慣例  
があったようで、それに合わせるために、素人  
という設定に改変したのでだろう。『天正狂言本』  
が、江戸期の狂言台本に比べて能・謡曲との関  
係がより親密であることについては、表章氏が  
指摘されているが(『能楽史新考(一)』(昭和54)  
『天正狂言本』について)、能の催しを扱った  
曲も「鬼松風」と同じく『天正狂言本』所収の  
「竹松」ぐらいで、両曲とも江戸期には廃曲に  
なっている。おそらく狂言の中で能を扱うこと  
を次第に遠慮するようになったのであろう。

(法政大学能楽研究所所員)